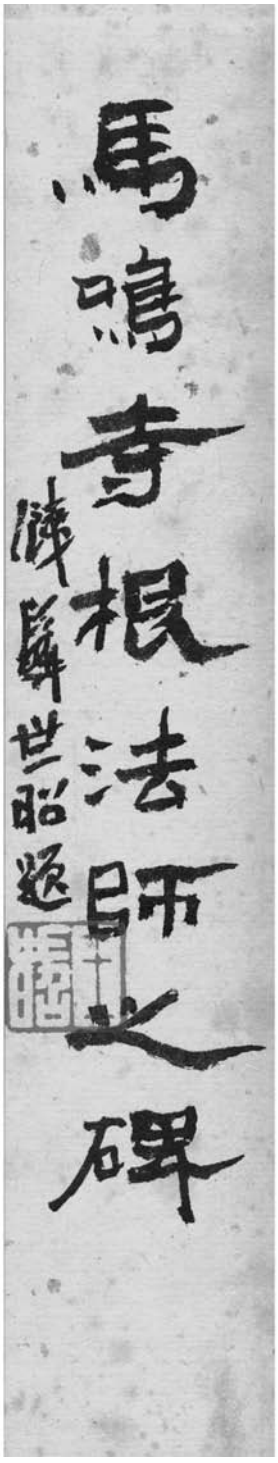
「馬鳴寺根法師碑・未断本」

A

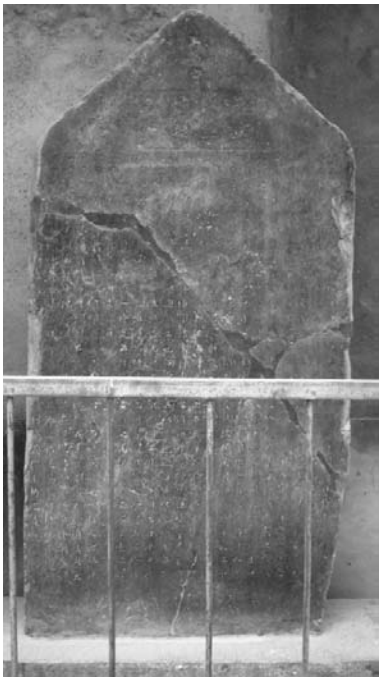
B



C

『馬鳴寺根法師碑』は、北魏末の楷書の代表作の一であり、正光四年（523）の建立である。字画は稍太く、結構も整い、鋭い書風を示している。龍門造像記の書風とも少し趣が異なる。楊守敬を始めとして清朝後期の金石家の多くがこの碑の書風を誉めている。碑額があり、中央上部に楷書で「馬鳴寺」とあり、その下にやや大きく、陽刻の楷書で「魏故根法師之」とある。22行、行あたり30字である。現在、原碑は山東省済南の石刻博物館に所蔵されている。碑石は、図③④⑤に見られるように、左上から右下にかけて斜めに断裂痕が見られる。ここに紹介する剪装本は、碑石が断裂する前の未断時の拓本である（図②参照）。

図③　馬鳴寺根法師碑・原碑



図②

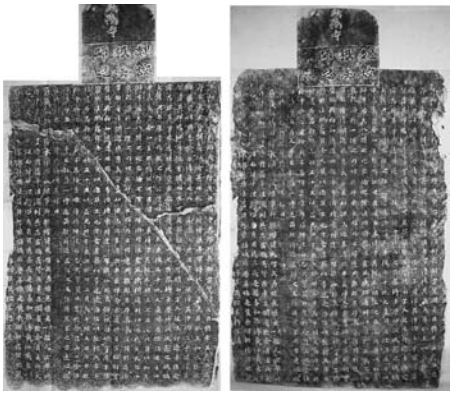
この碑の未断の拓本は極めて得がたい。市中に流布するものは多くが断後拓本であり、稀に「未断本」とあるも石碑に加工して偽装したものが多い。この本の題簽は三種在り、Aは、書帙に、Bは表紙に、Cは帖内に付され、それぞれの題簽には、A「未断本根法師碑　丙辰三月商石」、B「馬鳴寺根法師之碑　鐵髯世昭題」、C「魏根法師碑　未断本　山木盦攷蔵」と書かれている。Aを書かれた方は、戦前から金石碑帖を収集研究され、書を楽しまれていた岡村商石翁である。二十代のおわり頃に、面識を得て、時折訪問して入手した碑帖を批評していただいた。一九七〇年代の書である。商石翁の収集碑帖は、大阪市立美術館に師古齊コレクションとして蔵されている。Bは、香港の書法家・王世昭である。東京の個展の折りに所蔵碑帖も展覧されており、その折りに書いていただいた。爨寶子碑の珍しい旧拓を所蔵しておられた。Cは、この本の旧蔵者・趙聲伯（名は世駿、山木庵と号す、清末民国期に活躍）の筆である。当時の最も優れた碑帖の鑑別家の一人であり、多くの善本を所蔵した。褚遂良の書法を善くし、見事な書作品を残している。ＡＢＣの三件の題簽は、私には思い出深い書である。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤　滋　メールアドレス　mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

図④

断裂後拓本　　未断拓本



図⑤

断裂後拓本　　未断本

書道芸術院
平成の群像（2013）

太田蓮紅

3人の師に支えられた道

師（故大内魯邦先生）と巡り合ったのは、小学校1年の書初の宿題で四苦八苦している時でした。師走の雪の日隣家に訪れていた師に手解きしてもらって握った大きな筆、師の言葉に促されるまま書き終え、大きな手で頭を撫でて褒められたことが今でも忘れられません。こんな小さな出来事が現在の書活動をしている私をどこかで支えていてくれるのかもしれません。その後、中・高校と進学する中で師との再会、又尾形鼎山先生の意欲的な指導のもとに徐々に書の道に入ることになるとは夢にも思っていませんでした。気がつけば2師は父を説得し、大東文化大学進学も決めていました。2人の師から手渡された1通の紹介状を持ち大学1年の秋、中島邑水先生の教えを受けることになりました。これが3人目の師との出合いでした。臨書勉強のむずかしさと前衛書の魅力に触れたのもこの頃で楽しくもあり、辛くもあった4年間でした。前衛書の世界の扉を開けてくれた3人の師には今はただただ感謝するばかりです。心を鍛え、技術を磨き、表現力を高めるように教えられました。自身の心の変化は常に作品の中に克明に示されるので、制作者は常に内面の感性を鋭く磨き込む必要があるかもしれません。

2年半前、忘れもしない東日本大震災、恐怖の2分40秒、もうだめかもしれないと思った強い揺れ、自然の力の恐しさをまざまざと見せつけられた日でした。自然に向った時の人間の力のなさを実感したのもこの日でした。この時を境にそれぞれの価値観も変化したことを作品の中から読みとれた気がしました。今後はこれまでと違った心の叫びや魂と魂に呼びかけ、今ここに生きているという存在感を示すような書であり、又今日まで歩み続けて来た人生という道に感謝しながら自身の生き様を表現してゆきたいと強く願う日々です。

「第4回北京国際書法隔年展」・「中日著名女流書家作品招待展」　出品作品

書のひろば

理事長　辻 元 大 雲

書道芸術院秋季展盛況に

秋の企画展として定着している秋季展は本年も東京セントラル美術館とアートサロン毎日での推薦作家展を併催して開催された。66回展峰雲賞選考にて候補作品となった作家より、峰雲賞受賞の前衛書部工藤永翠、各部最終候補作家漢字部種谷萬城、かな部前田まさ美、現代詩文書部大隅晃弘、篆刻刻字部大沼樵峰の5名が推薦作家としてアートサロン毎日にて一人7m余の壁面を使用して大作に挑戦、素晴らしい展示となった。

セントラル会場選抜作家は財団役員および同じく峰雲賞最終候補より選抜された計116名が出品。更に恒例の審査会員候補からの公募作360点、226名より秋季菊花賞10名、秋季俊英賞40名（本年より入選改め秋季俊英賞と改称）により本院の代表作家展として存在を内外に示した企画展であった。

会期初日の表彰式、研究会、更に来賓をお招きしての祝賀会も盛況で充実した展覧となった。

SHO2 現代日本の書代表作家100人展　パリで盛大に開幕

昨年3月から5月にかけ約2か月間開催された、毎日新聞社・毎日書道会とフランス国立ギメ東洋美術館主催による「SHO1 現代日本の書代表作家41人展」に続き、本年10月23日より2014年1月13日まで、「SHO2 現代日本の書代表作家100人展」が盛大に開催された。

毎日書道展に参画する団体より100人が選抜され、昨年と同じ毎日書道展公募作品サイズで、一部ケース陳列のため巻子、帖、更に軸装での出品もあり作品内容は多彩であった。特に額装作品は輸送の関係から裏打ちは日本で行い額装を事前交渉の上、パリ市内の工房に依頼した。仕上がりはマットで黒、朱、青、緑などの額縁はシンプルで美しく出来上がっていたが、一部浮き上がってたるみのあるものもあり難点もあった。初めての試みであり、仕方ない面もあった。

本展実行委員長として10月17日より現地入りし、開幕セレモニー、ワークショップ、揮毫会などの各種イベントを無事こなし10月28日早朝帰国と長期間の任務となった。10月22日夕刻、内覧会とレセプションが日本より訪れた520余名の参観団、フランス国内の招待者、報道関係者をお招きし盛大に開催された。美術館地下1階の大ホールは約300名が集い、代表5名による揮毫会が舞台上で催された。漢字部石飛博光、かな部松井玉箏、近代詩文書部船本芳雲、大字書部仲川恭司、前衛書部中原茅秋の各氏が披露、喝采を浴びた。開幕挨拶は朝比奈毎日新聞社社長、森川駐仏日本大使館公使参事官、フランス側はノエル・コルバン文化通信省次官補とギメ美術館フレデリック・サリ副館長が行った。その後カクテルパーティが行われた。地下1階とホールに入れなかった日本訪仏団約300名は1階エントランスホールにてにぎやかに行われた。訪仏団は大小27団におよび、入退場の交通整理、バスの手配で大混雑となった。

翌23日はフランス国立図書館にて唐太宗皇帝書、温泉銘の原拓参観が1回20分、20名限定、27回に分け特別室にて朝10時から午後7時過ぎまで行われ、天下の孤本の参観は極めて稀で、また500名余への公開は考えられない企画であったが、3年越しの交渉が実現した。今回の参観者には貴重な機会となった。皆本物の持つ迫力、魅力に酔いしれた好機となったと思う。

夜7時半より市内の超豪華ホテルウエスティンパリの最高級宴会場「インペリアルホール」での祝賀会。全員着席の上、素晴らしいフランス料理を頂く。500名を超える参加者は宮殿を思わせる荘重華麗な大ホールに息をのみ、シーフードをベースにした料理は素晴らしく、余興のアコーデオン演奏が奏でられる中、楽しく和やかに9時半過ぎまで盛会であった。

24日より26日まで3日間、ギメ美術館円形ホールにて午前中ワークショップ、午後揮毫会を1回20名定員で連日行う。24日のワークショップは安藤豊邨氏による「刻字」をテーマに、院より後藤大峰氏も助講師として担当、本格的な桂材による刻字制作を安藤氏が、希望者6名にセラミックボードでの実習も行われ、参加のパリ市民は興味深く参観また実習を行った。午後の席上揮毫会は漢字鬼頭墨峻、かな下谷洋子、大字書柳碧辭の各氏が披露。質疑では墨や紙、筆など色々な質問が寄せられ充実した内容であった。25日は永守蒼穹主任講師によるワークショップ、午後の揮毫会は漢字荒井智敬、永守蒼穹など4名が揮毫した。26日山中翠谷主任講師によるワークショップ、午後の揮毫は近代詩文書を辻元大雲、大字書山中翠谷、前衛書を丸尾鎌使が担当した。いずれも熱心なパリ市民の参加により充実、熱気に溢れた催しであった。

このワークショップ・揮毫会は今後11月12月1月に各3日間開催が予定されており、11月13日～18日には書道芸術院中心の団が辻元大雲団長、下谷洋子、小竹石雲を担当者、ほかに同行者計17名で結成されている。14日には辻元大雲が講師、小関瑞華が助手としてパリ日本人学校で書写書道授業を小中学生対象に行うことも計画されている。

次号にて詳細を報告予定。

21世紀の書
―私の主張―

漢字(二)

崎井恵風

願いの書「春色」

第64回書道芸術院展に出品した作品です。認知症が徐々に進行した母の介護に日々追われていた頃でした。誤嚥性肺炎で緊急入院して一進一退をくり返し、心身共に疲れていました。とにかく作品を書かねばとのあせりで心の余裕のないまま、締切日直前ただ筆を運びました。限られた時間での集中力が「春色」を書かせてくれたのでしょうか。自然に筆が動きました。母の回復だけを願って、春を待つ気持で…。筆は長鋒筆。「色」の終筆の渇筆は、やや側筆気味に紙面に当たり筆画開きました。はからずもこの作品で、秋季展推薦作家に選んでいただきました。

第64回　書道芸術院展「春色」　崎井恵風書

かな(二)

田子白嶺

「書」は他の芸術分野と全く異なる特有の「美」を表現するもので、書美とされるものに線美、造形美、流動美、墨色美、余白美、構成美、等があり素材とともに表現されます。この表現技能修得のため、臨書の必要性は当然ですが、私は古筆や古典から美表現の原理を学び、これを創作に応用するのが良いと思っています。書美には多くの原理が存在します。古筆は皆それぞれ字形も作風も異なりますが、その異なった中から全てに共通するものがありそれが原理です。これを理解し応用する時は自分も変わることになります。たとえば古筆の流動美の基本とされる連綿はその場に応じて手法が異なりますが、古筆の大半はこの連綿線が無理なく自然で目立たなくするための工夫がなされ、この点が共通する原理です。

なかには特種なものや例外もありますが、それらは別の意図があります。

大字がなの創作では文字が大きいので古筆と同じ手法ではやはり連綿線は目立つ、そこで自分なりに手法を工夫する、だから変わるのです。表面上は変わっても原理的には同じです。

造形原理の一例ですが、全ての古筆の文字造形に共通する点は、造形のどこかに必ず直線が含まれる。また、同質、同形の重複をさける。左右対称にしない等、他にも多数の原理があります。原理を探すには、美しいとされる理由を考えてみて、それを他と比較します。

古筆の連綿手法で中心移動連綿（関戸、針切）字形を変化させる短縮連綿（三種）文字と連綿線の交差（一種）いずれも目立たなくする手法の例です。

こぞ(曽)とや

高野切第一種

ゆきか(可)ふそ(所)らの

関戸本古今集

ゑ(衛)に(尓)もか(可)り(利)ふね(年)の

針　切

ことのは

高野切第三種

書道芸術院秋季展

審査会員選抜作品
審査会員候補公募作品

会期　平成25年10月1日(火)～10月6日(日)
会場　東京セントラル美術館
　　アートサロン毎日（推薦作家展会場・毎日新聞社内）

秋季展実行委員長
後藤大峰

夏の暑さが未だ残る10月1日、恒例の「書道芸術院秋季展」本年も銀座セントラル美術館にて開催された。

今回展は例年の財団役員、審査会員選抜の各先生方と審査会員候補の公募による入賞作品に加え、一昨年より始まった「推薦作家展」が今回も毎日アートサロンに於いて開催された。

推薦作家の選抜の内訳は、第66回書道芸術院展にて全5部門中、峰雲賞受賞最終選考に残った、候補者5人を指します。

初日には表彰式、研究会が開かれ推薦作家の紹介、秋季菊花賞の表彰、新設の秋季俊英賞の賞状授与が行われた。

研究会では実行委員の山口仙草先生の進行により進められた。

まず、推薦作家が紹介され、5人各氏が、次に秋季菊花賞受賞者が紹介されそれぞれに制作意図、作品に対する思いなどを発表した。その中で前衛書部の工藤永翠さんは、専門以外の現代詩文書を出品された事のご苦労を紹介され研究会出席者に感銘を与えた。その後、秋季菊花賞受賞者と各部選考委員（助言者として）が加わり受賞者、選考委員、研究会参加者が受賞作品について白熱した討論を交えて研究会は盛り上がりを見、最後、顧問の恩地春洋先生よりご意見を頂き最後に辻元大雲理事長により全体の総括を述べていただき研究会を終了した。

その後、ご来賓をお招きし恒例のレセプションを行って初日を終えた。

表彰式で理事長あいさつ

書道芸術院秋季展〈審査会員候補公募状況〉

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	秋季俊英賞	落選
漢　字	134	85	4	15	66
か　な	16	14	1	2	11
現代詩文書	111	73	3	13	57
前　衛	96	52	2	9	41
篆刻・刻字	3	2	0	1	1
計	360	226	10	40	176

大勢で賑わう懇親会

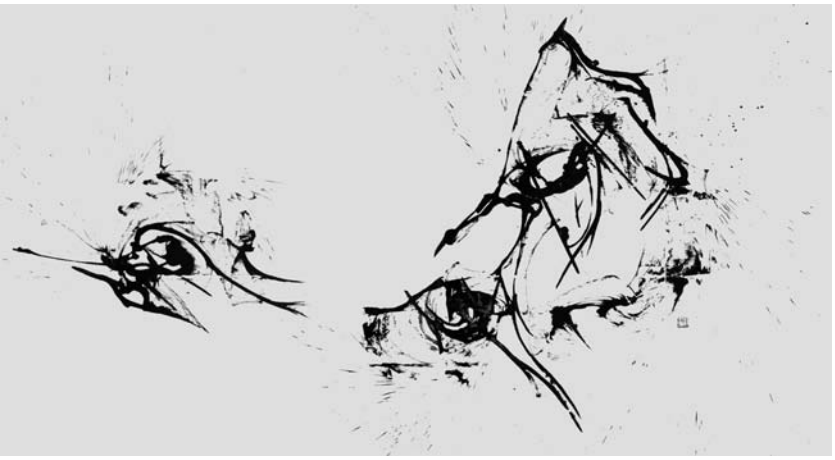
大盛況の推薦作家展

〈併催〉 推 薦 作 家 展

《 大 隅 晃 弘 》

〈全てを断つ〉 161×359㎝

《 工 藤 永 翠 》



〈イーグルアイ〉 182×364㎝

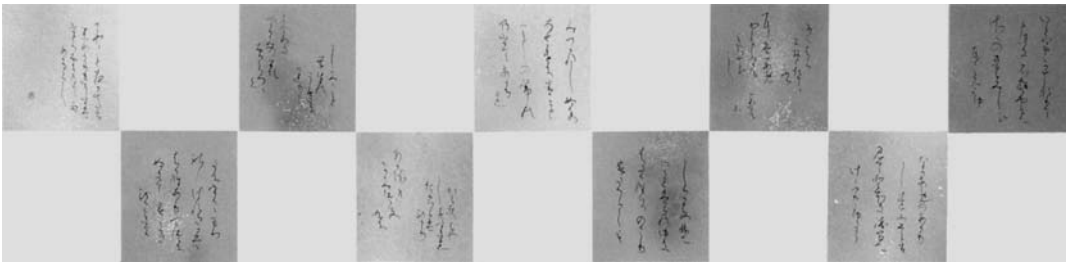
《大　沼　樵　峰》

〈妙言無古今〉　60×155㎝

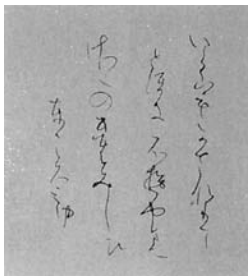
《種　谷　萬　城》

〈杜甫詩〉　135×69㎝× 4

《前　田　まさ美》



〈下谷東雲先生の歌を書く〉　20×18㎝× 9　全体



部分

書道芸術院役員作品

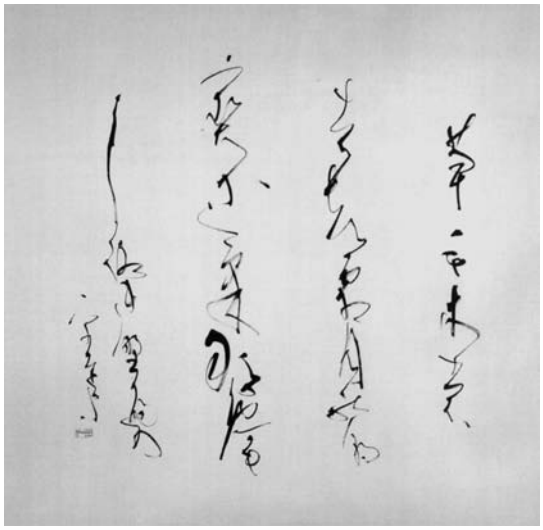
〈涼風や〉

（公財）理事長・常任総務　辻 元 大 雲　　67×148㎝

〈単純〉

（公財）常務理事・常任総務　小 竹 石 雲　　70×145㎝

〈草も木も〉



90×93㎝

（公財）常務理事・常任総務　下 谷 洋 子

〈盆〉

120×90㎝

（公財）常務理事・常任総務　大 野 祥 雲

〈SIN〉

常任総務　太 田 蓮 紅　　91×121㎝

〈乱（おさめる）〉

常任総務　新 井 京 華

182×61㎝

〈曲水〉

常任総務　大 石 仙 岳　　73×153㎝

〈被災者の皆様に〉

常任総務　大 平 邑 峰

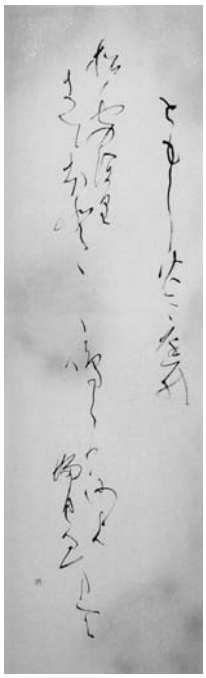
180×60㎝

〈「感」（金文）〉

常任総務　有 野 琤 扇

120×90㎝

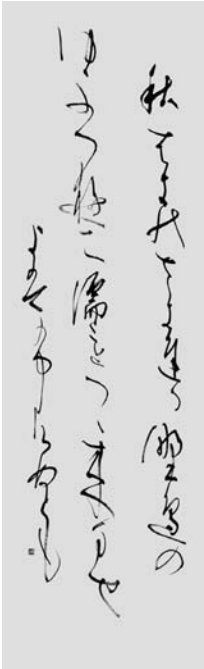
〈ともし火〉



常任総務　大 辻 多 希 子

178×58㎝

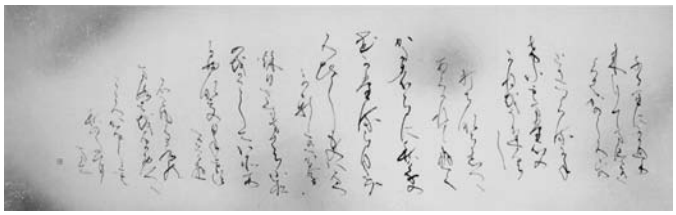
〈秋萩〉



常任総務　奥田瑞舟

175×53㎝

〈ふるさとに〉



常任総務　木村東舟　　55×178㎝

〈月下の逢瀬〉

常任総務　尾形澄神　　70×150㎝

〈別れ〉

常任総務　北村白琉

180×60㎝

〈発〉

常任総務　崎井恵風

120×90㎝

〈青山横〉

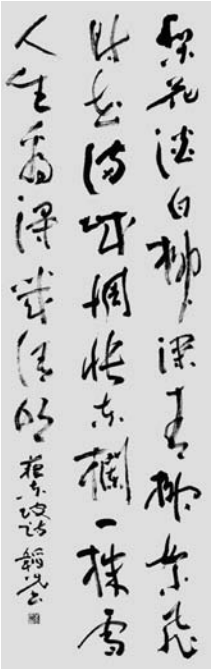
常任総務　北畑芳草

180×60㎝

〈杞陽の句〉

常任総務　田村鄭雲　　55×175㎝

〈冶春〉



常任総務　児玉韜光

180×56㎝

〈求〉

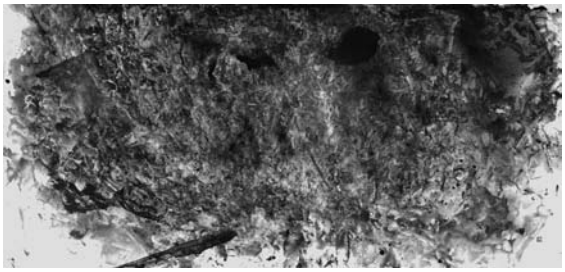
常任総務　川島舟錦　　90×120㎝

〈水〉

常任総務　前田龍雲

135×70㎝

〈無明〉



常任総務　平岡千香子　　70×151㎝

〈喜〉

常任総務　知野洛水

152×73㎝

〈許渾詩〉

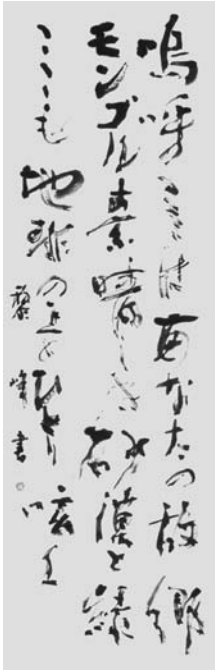
常任総務　木村英峰

177×55㎝

〈明珠在掌〉

常任総務　東福青篁

114×84㎝

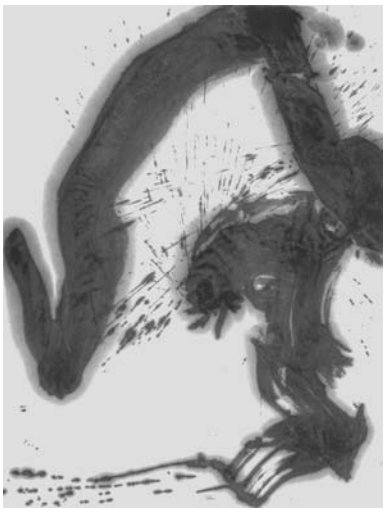


〈アリウカあなたの故郷へ共に〉　常任総務　中野黎峰　175×55㎝

〈悠然〉　常任総務　濱田尚川　174×53㎝

〈龍吹鶴語〉　常任総務　半田藤扇　175×55㎝

〈諷誦文〉　常任総務　目良泰幽　175×55㎝



〈風〉　常任総務　水野春翠　120×90㎝

〈尾崎放哉の句〉　常任総務　山崎掃雪　90×120㎝

〈金久美智子句「空と海」〉　常任総務　広瀬舟雲　70×138㎝

〈廻る季節〉

常任総務　大 町 青 蓮　　60×180㎝

〈風塵〉

常任総務　森 地 桂 鶴

175×53㎝

〈燃ゆる頬〉

常任総務　石 下 珠 光

180×60㎝

〈雪渓〉

常任総務　橋 本 玉 扇

172×53㎝

〈丘〉

常任総務　宮 崎 芳 玉

150×70㎝

〈空気祭〉

常任総務　横 田 汀 華　　60×180㎝

秋季菊花賞

審査会員候補

〈蘇〉

谷口青龍

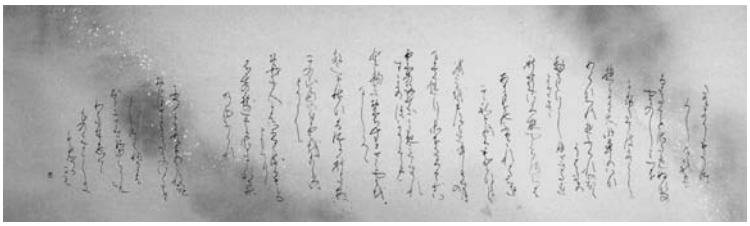
121×91㎝

〈長恨歌〉

早川蕙風

142×62㎝

〈玉よりも〉



治田芳江　53×180㎝

〈過香積寺〉

土屋里美

178×59㎝

〈稲垂りぬ〉

三宅佳峰　68×149㎝

秋季菊花賞

審査会員候補

〈石榴〉

金濱珀燁

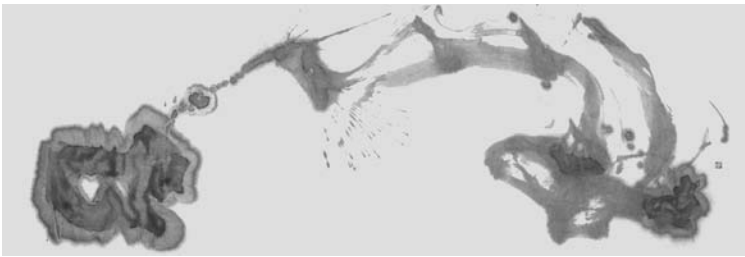
180×60㎝

〈建〉

吉永沓花

120×90㎝

〈かけ橋〉



近藤桜紅　61×182㎝

〈未来へ〉

大町菜円

182×61㎝

〈檜山哲彦の句〉

神谷雲卿　86×116㎝

古典鑑賞 ㉒

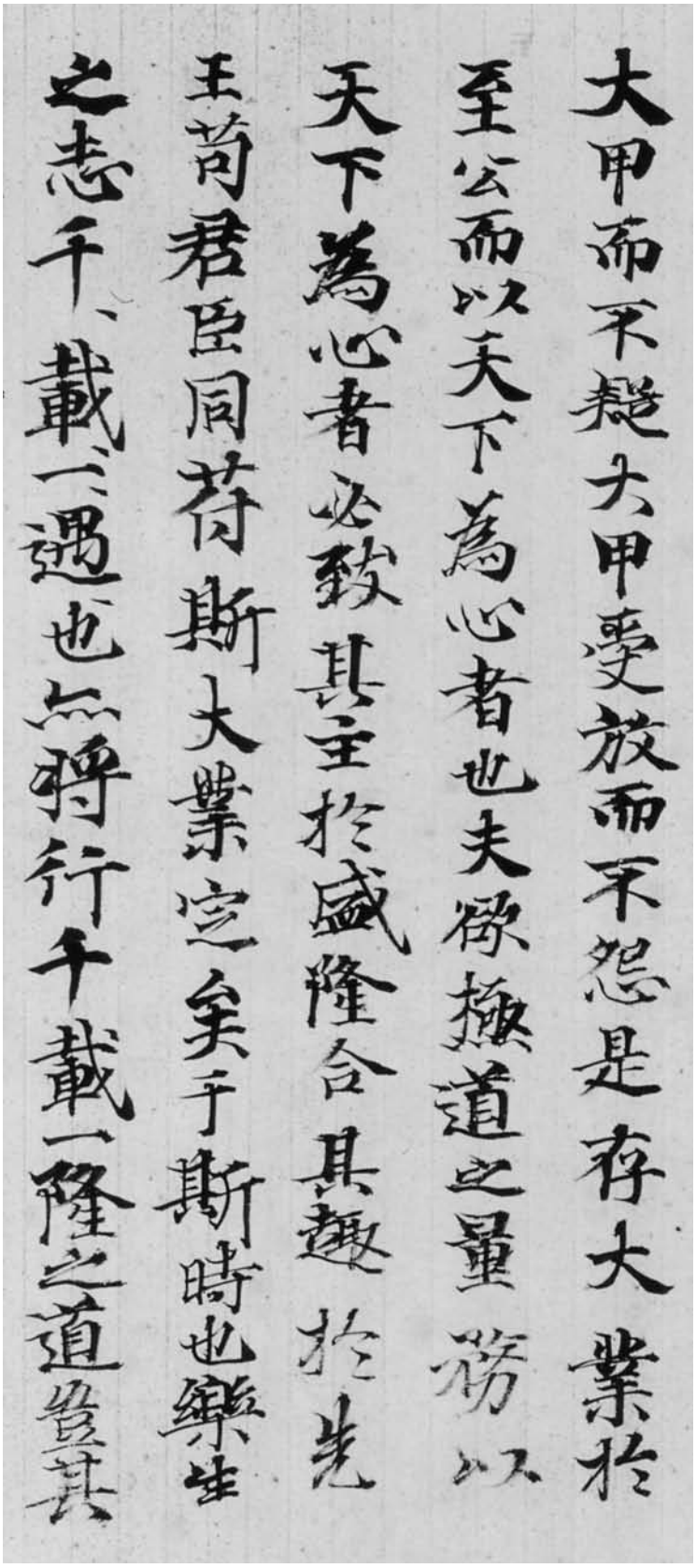
楽毅論（光明皇后）②

漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

※落款を必ず入れる
署名、もしくは○○臨
（押印のみも可）

〈解説〉
『楽毅論』は中国・戦国時代燕（えん）国の武将であった楽毅の人物を述べた文章であり、三国時代の夏侯玄（字は泰初）の作。かつて中国東晋の能書・王羲之がこの『楽毅論』の名筆を遺した。本巻は舶載された王羲之書法の臨書と考えられているが、加えて皇后独特の品位と気魄のこもった書風が醸し出されている。（編集部）



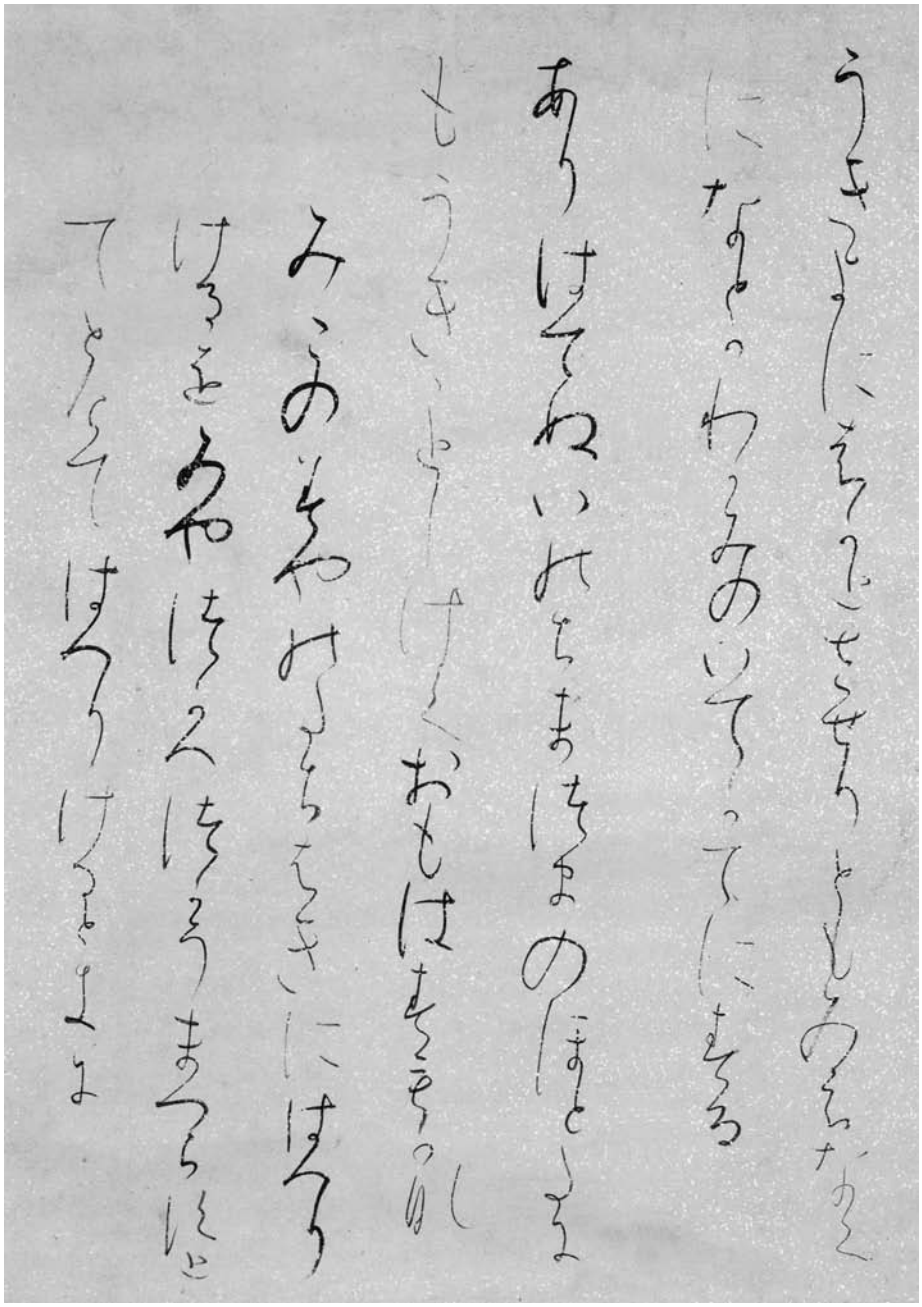
大甲而不疑、大甲受放而不怨、是存大業於／至公。而以天下為心者也。夫欲極道之量、務以／天下為心者、必致其主於盛隆、合其趣於先／王。苟君臣同符、斯大業定矣。于斯時也、楽生／之志、千載一遇也。亦将行千載一隆之道。豈其

古筆鑑賞

高野切第三種（伝紀貫之）②

⑯

〈よみ〉うきよには（者可）かどさせりともみえなく（久）
になどかわが（可）みのいでが（可）てにする（春）
ありはてぬいのち（能）まつまのほどだに（多尓）
もうきことしげく（久）おもはず（春毛）もがな（可那）
みこのみや（美）のたち（能多）はき（者）にはべり
けるを、みやづか（徒）へつか（徒）うまつらず（須）
て、とけ（介）てはべりけるときに（支尓）



（70％縮小）

〈解説〉

第三種書風の筆者は、三人の中でもっとも若い書き手であったと考えられている。「粘葉本和漢朗詠集」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）、「近衛本和漢朗詠集」（陽明文庫蔵）、「元暦校本万葉集巻第一」（東京国立博物館蔵）、「蓬莱切」（五島美術館ほか蔵）、「法輪寺切本和漢朗詠集」（東京国立博物館ほか蔵）など、同筆の古筆遺品が伝えられている。これらは、いずれも古筆家などの鑑定により藤原行成筆を伝称されるが、行成の自筆ではない。当代の能書活躍の記録から推定して藤原公経をあてる小松茂美博士の説が提示されている。

（島谷弘幸著「書の美」より）

かな研究部臨書課題

- 競書作品は、左の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**
- 用紙は**半紙普通判（料紙可）**
  〈たて長に使用〉
  別紙を裁断して貼付も可。
  半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。

特別研究部臨書課題

- 毎日展公募サイズ以内・縦横自由
- 左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【十二月十日締めきり】用紙　半紙普通判

大野祥雲選書

人生而有欲　よみ（人生まれながらにして欲有り）

書体＝自由

習い方解説（二）

大野祥雲

人生而有欲（荀子）
（人生まれながらにして欲有り）

人間が欲望を求め、そこに限定がなくなれば、人々は争い社会は混乱する。そこで社会規範を制定し、調和の必要から「礼」が起こった。というのが荀子の主張のようです。

「人」逆筆で入った左払いを受けて、右払いも食い込んだ線に。

「生」二画目の横画を長くし、終筆で突き上げて縦画とする。上疎、下密。

「而」筆先を利かして息永く運筆。上下に余白をとって規模大とする。

「有」左払いを深い線とし、横画へと続く。月の内部の白が大切。

「欲」偏と旁の力関係を考えながら構成。じっくりと収めた。

漢字規定 秀級以下【十二月十日締めきり】用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

温柔敦厚 よみ（温柔敦厚）

書体＝楷書

習い方解説 (二)

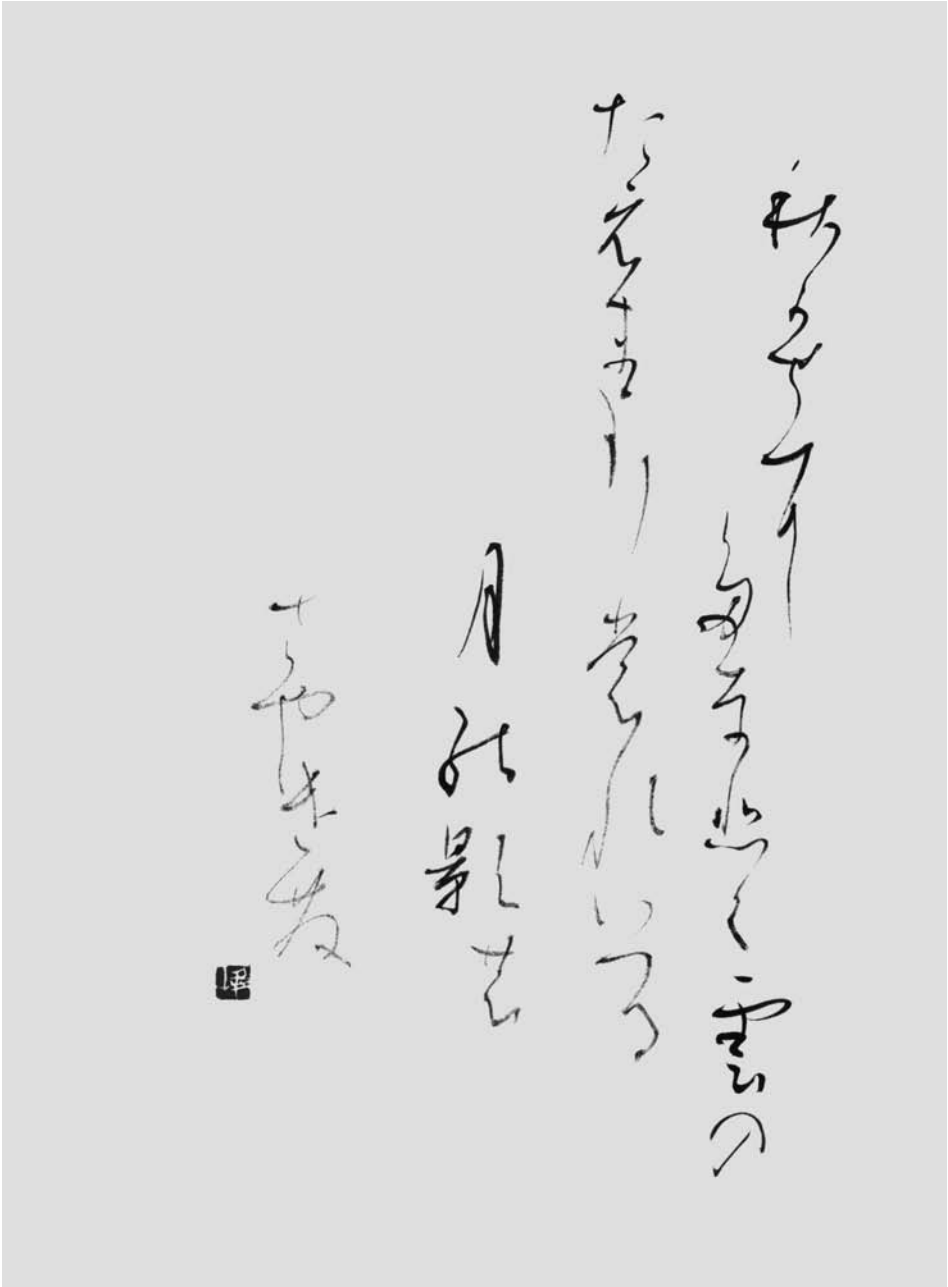
名越蒼竹

温柔敦厚（温柔敦厚）（禮記）

言葉が穏やかにして素直、優しくしてわだかまりのないことの意味から虞世南の孔子廟堂碑の書風としました。起筆・収筆・転折を穏やかに表現し、送筆部に力を込めます。見た目は穏やかですが、芯は鋼鉄で出来ているような強さを持たせることが大切です。また伸び伸びと書かれた印象を与えるため、字の中に小さく書かれたところがあります。文字を書く升目のスペースを埋め尽くしてしまうと失敗しますから注意してください。

かな規定　初段以上【十二月十日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書



よみ方　秋か(可)ぜに(耳)た(多)な(奈)び(悲)く(久)雲のたえまより
も(裳)れいづる月の(能)影の(農)さやけ(遣)さ(散)

創作

習い方解説 (二)

平川峰子

秋風にたなびく雲の絶え間より
洩れ出づる月の影のさやけさ
（新古今集　藤原顕輔）

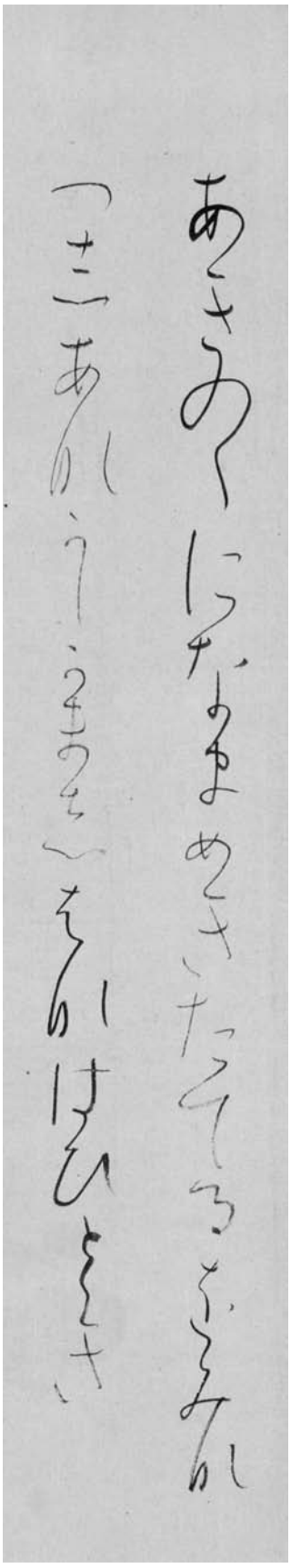
かなの生命と言える連綿の基本は古筆から学びます。

つい最近「すぐ役に立つことはすぐに役立たなくなる」という言葉を聞き納得させられました。これは九月十一日に百一歳で亡くなられた橋本武先生の言葉です。教師時代に作家の中勘助（一八八五―一九六五）が二十歳代に発表した小説「銀の匙」を読み込むことを国語の授業としていたそうですが、解釈が深過ぎて六年間の授業でもなかなか進まなかったとのことです。古筆の臨書も同じものを十年間勉強するということに疑問を持ったことはありません。その間に新しい発見も出来ますし、何といっても線質が深くなります。

国立博で開催された「和様の書」の古筆はすばらしいものでした。

かな規定　秀級以下　【十二月十日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

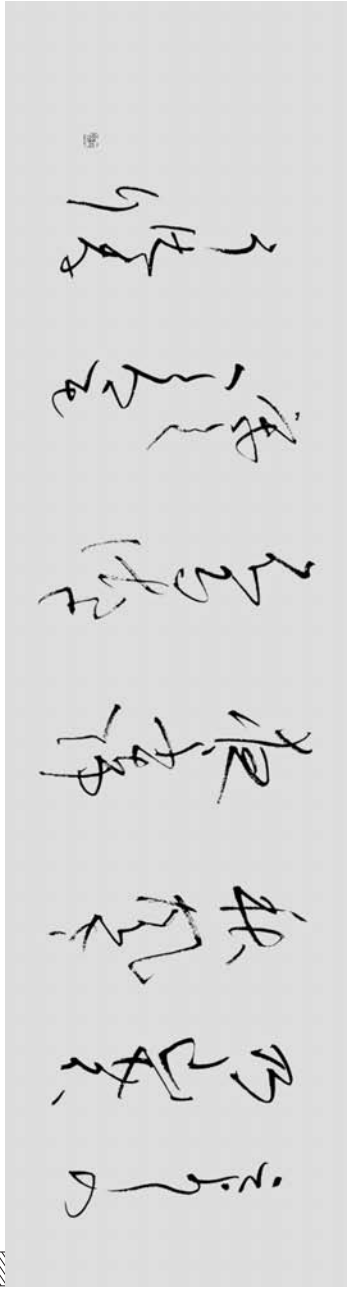


高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　あきのゝになまめきたてるをみな(那)へし(志)
あな(那)か(可)しが(可)まし(志)は(者)な(那)はひとゝき

かな条幅規定【十二月十日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

善養寺紅風選書



よみ方　み(三)よしのの(乃)山の(農)秋風さ夜ふけ(希)て
ふ(不)るさ(佐)と寒く(久)ころも(毛)うつ(徒)な(奈)り

創作

出品券貼付位置

習い方解説 (二)

善養寺　紅　風

み吉野の山の秋風さ夜ふけて
ふるさとさむく衣打つなり
（藤原雅経）

横形式は、縦より流れが出しにくいですが、文字の大小、広狭、疎密等で流れの表現が作れます。中央で文字を大きくし、後半は接近させやや小さめに収めました。複雑な文字をえらばず基本的な組合せで自然に仕上げました。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【十二月十日締めきり】用紙　小画仙紙半切

牧　泰濤選書

月色半留梧影上　露華應到菊花團
（月色半ば留まる梧影の上、露華應に菊花の團に到るべし）

書体＝自由

習い方解説（二）

牧　泰濤

筆を選ぼう。

今号は、長鋒羊毫で書いた。前号の重厚な線質に対して今号は流暢な線で表現してみた。「下手な大工はノミ一丁」といわれる。これ一丁あれば何でも彫れる――は一見腕自慢に聞こえるが、いい仕事をするなら目的合致の道具が要る。長短、太細、柔剛の筆を駆使して、心情表現を楽しみたい。

漢字条幅規定　秀級以下【十二月十日締めきり】用紙　小画仙紙半切

竹本龍汀選書

風景似桃源
（風景桃源に似たり）

（楊發）

書体＝自由

習い方解説（二）

竹本龍汀

今回も五字句一行書です。字群を「風」、「景似桃」、「源」の三部分に分けて字群を構成してみました。

文字本来の字形を生かしながらやデフォルメを加えて自然な流れを表現してみました。「風」の下の払い、「桃」のきへんの下に注意して、字間と気脈について学習してみて下さい。

ペン字規定【十二月十日締めきり】

三浦鄭街選書

太宗は特に王羲之を溺愛し、精力的に
王書を蒐集した。その収蔵品は魏徵、
虞世南、褚遂良らによって鑑別された。
褚遂良の「王右軍書目」は、その時の、
リストで、資料的価値は高い。　鄭街書

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (二)

三浦鄭街

用具は「水性ボールペン」です。色々な太さがありますが0.7㎜を使ってみました。筆も同様ですが、数種類使ってみて表現方法を変えるのも良いかと思います。

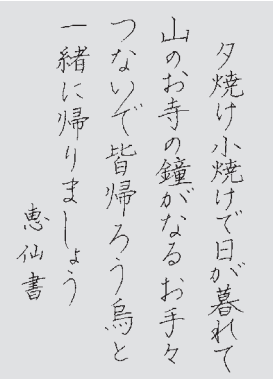
内容は、中国書道史の中から唐・太宗が王羲之を尊崇して、その書を多く集めた文章を取り上げてみました。

※蒐集（しゅうしゅう）
収集と同じ意味。コレクション。

※落款を必ず入れる。
（自分の名前を入れること）

今月のホープ作品各部総評 NO.629

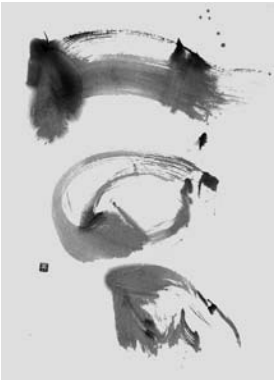
ペン字部　師範　飯嶋　恵仙
しっかりとした点画でゆるぎのない線質は見事である。名前まで一貫したリズムの佳作である。
◎ペン字部総評　楷書行書草書と多彩な作品が多かったが草書の場合はしっかりと筆順を確かめる事が必要である。（蒼玄評）



漢字条幅部　師範　土屋　恵仙
羊毛筆を駆使し深みと厚みのある線が魅力。曹全碑を学び現代風に生かした。隷書は横形式に合う。
◎漢字条幅部総評　漢字条幅部初の横形式は故村山元信先生の発案。常に革新の意志を抱く先生の志を思う。（翠風評）

現代詩文書部　特選　氏家　久光
鍛えあげられた線による上での考え抜かれた構成、字間、行間の間合の見事さに感嘆。
◎現代詩文書部総評　一字、一字のディフォルメも過ぎたるは猶及ばざるが如しでは？（無極評）

前衛書部　特選　丹羽美恵子
簡素な構成に癒しを感じるのも墨色の効果があってのこと。このバランス感覚忘れずに初心大切。
◎前衛書部総評　表現の一部として落款を考えて。公募者全員の構想力に将来性を感ず。（慧香評）

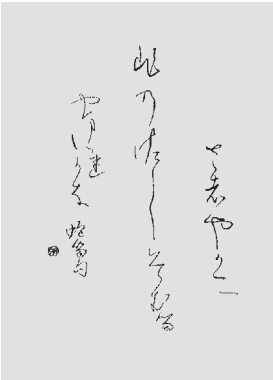


かな条幅部　師範　濱田　竹雪
切れのよい線で大きな運筆の表現は知的な魅力にあふれ、余白美もよい。印の位置再考を望みます。

◎かな条幅部総評　全般に墨色の冴えを欠いて残念。変体がなと𛀁の誤字が目立った。手本の不明瞭は十分調べること。（明子評）

漢字部　師範　小野寺久美
李嶠詩風な古典の書風を取り入れ唐様の真髄を極めた格調の高い作品。鍛錬された線が光彩を放つ。
◎漢字部総評　池を地にしたものが散見。また輪の草書体の誤字が多く見られた事が気になった。よく調べて書いて下さい。（舟雲評）

かな部　師範　田中　耶衣
文字を幾つか換え、オリジナルへの一歩が好ましい。熟慮して字を選び、自然に運んでよく整う。
◎かな部総評　さはやか、遅の誤字など散見。和歌を書く時とでは字の大きさ、太細も変わります。筆も一考してほしい。（洋子評）

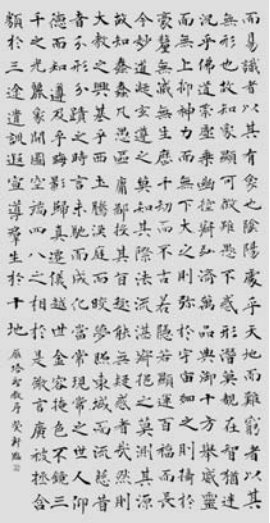


今月の
特別研究部優秀作品（特選）

臨書

（千葉）大内熒軒

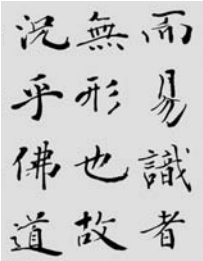
「雁塔聖教序」



大内熒軒臨

138×79㎝

拡大



◆渇筆の部分は線が生き生きし情感のこもる臨書となった。筆のためかシンニョウ、波法がかたいのが残念。（翠風評）

◆一枚の紙にこれだけの字数を書くのは大変な仕事、自然と筆の回転素晴しい所、少し淀んだ所があるが素敵！（倫子評）

◆書く人によって、味わいが異なるという臨書の力を堪能しました。しっとりと心に入り込みます。（明子評）

◆量感もあり、書き上げたという充実感がある。行間に明るさがもう少しあると更に飛躍する。（蒼玄評）

前衛書

（玄象）大鹿洋江

「結」

大鹿洋江書

81×91㎝

◆余白の取り方が素晴しい。淡墨だと筆の重りが表現され幾多の趣きをかもし出してくれ楽しい作。（倫子評）

◆鋭角的な線の中にチラッと見えるユーモラスな線と墨の滴り。赤い糸を思わせる印にも「結」を連想。（翠風評）

◆結という題を見て納得。制作過程は想像不可能だが、その楽しさは伝ってきます。更に深遠さを！（明子評）

◆淡墨でしっかりとした運筆で強弱のきいた見ごたえのある作品となった。細い線が少しうるさいか。（蒼玄評）

田中扇溪書

61×181㎝

現代詩文書

（墨縁）田中扇溪

「千代田葛彦の句」

◆直筆と側筆を巧みに駆使しスケールの大きな躍動的作品。「北」への想いが終りの二行に凝縮する。（翠風評）

◆前半は心のときめきをおさえ、後半その力を集めて激しく表現、それによって詩の心が伝わって来た。（倫子評）

◆筆の多様な動きを駆使した派手な作品です。あふれる思いをこれしかないとの表出は十分伝わるが…（明子評）

◆スケールの大きな雄大な作品になった。落款の収め方、少々軽すぎた感あり。（蒼玄評）

現代詩文書（もくせい）

森田藤谷

「吉田久美子のうた」

森田藤谷書

136×70㎝

◆にじんだ所とかすれた所を筆の持ち味を上手に表現し、また穂先の「われ」をこという所で表現。（倫子評）

◆ともすれば単調になりがちな植物系の筆（？）で渋く格調ある線を生み出した作者に脱帽するのみ。（翠風評）

◆かな作品にとり込みたくなるような間のとり方の美しさ、過剰でなく、描くようなタッチは見事です。（明子評）

◆筆の開閉の妙が素晴らしい。一文字一文字の造形に注意されたい。更なる精進を期待したい。（蒼玄評）

江本興舟書

56×175㎝

漢字（大雲）

江本興舟

「李白詩」

◆沈着な運筆の中に激しい流れが表現されていて、詩句と一致するものを感じる。墨色も美しい。（倫子評）

◆詩の静かな内容を表現すべく連綿を殆ど使わず感情を抑制して書いた。それでいて個々の字に彩あり。（翠風評）

◆内に秘めたものを美しく表現することには限りない羨望があります。味わい深い真摯な作に敬服です。（明子評）

◆文字の大小バランスを注意されたい。全体的にはまとまった落ち着いた作品になっている。（蒼玄評）

千葉華紅臨

35×136㎝

臨書（蓮紅）

千葉華紅

「筋切」

◆流れるような美しさを近くで感じ、やや離れた所は墨色の差が全体に変化を表現した美しさ感じる。（倫子評）

◆「前衛作家が一番勉強する」との扇舟師の言を思い出した。筋切の強い線がゆるみを見せず美しい。（翠風評）

◆中島邑水先生の山のような古筆臨書を拝見した日を思い出す。この学習が前衛書作となる魔法は魔術。（明子評）

◆細やかな流れをうまく表現している。最後までリズミカルに仕上げた。その一貫性が良い。（蒼玄評）

拡大

総出品点数 75点

創作の部（44点）
漢字―9点
かな―1点
現代―22点
篆刻―0点
前衛―12点
臨書の部（31点）
漢字―25点
かな―6点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
森地 東平　絹子
千葉 松村 秀扇

「かな」
奥田 瑞舟

「現代詩」
游水 荒川 空華
八戸 市川 紫泉
白弦 佐藤 弦佳
大雲 松永 香秋
もく 西川 藤象

「前衛」
若葉 工藤 山房
群馬 神澤 凌雲

（臨書の部）

「漢字」
千葉 竹浪 叙舟
英峰 佐藤 桂香
竜泉 小林 洋龍
澄春 土屋 恵仙
千葉 益子 翠蘭

「かな」
AI 藤村 昌子

漢字研究部
（雁塔聖教序）

選評　小浜大明

今月のホープ作品

徳永渓仙

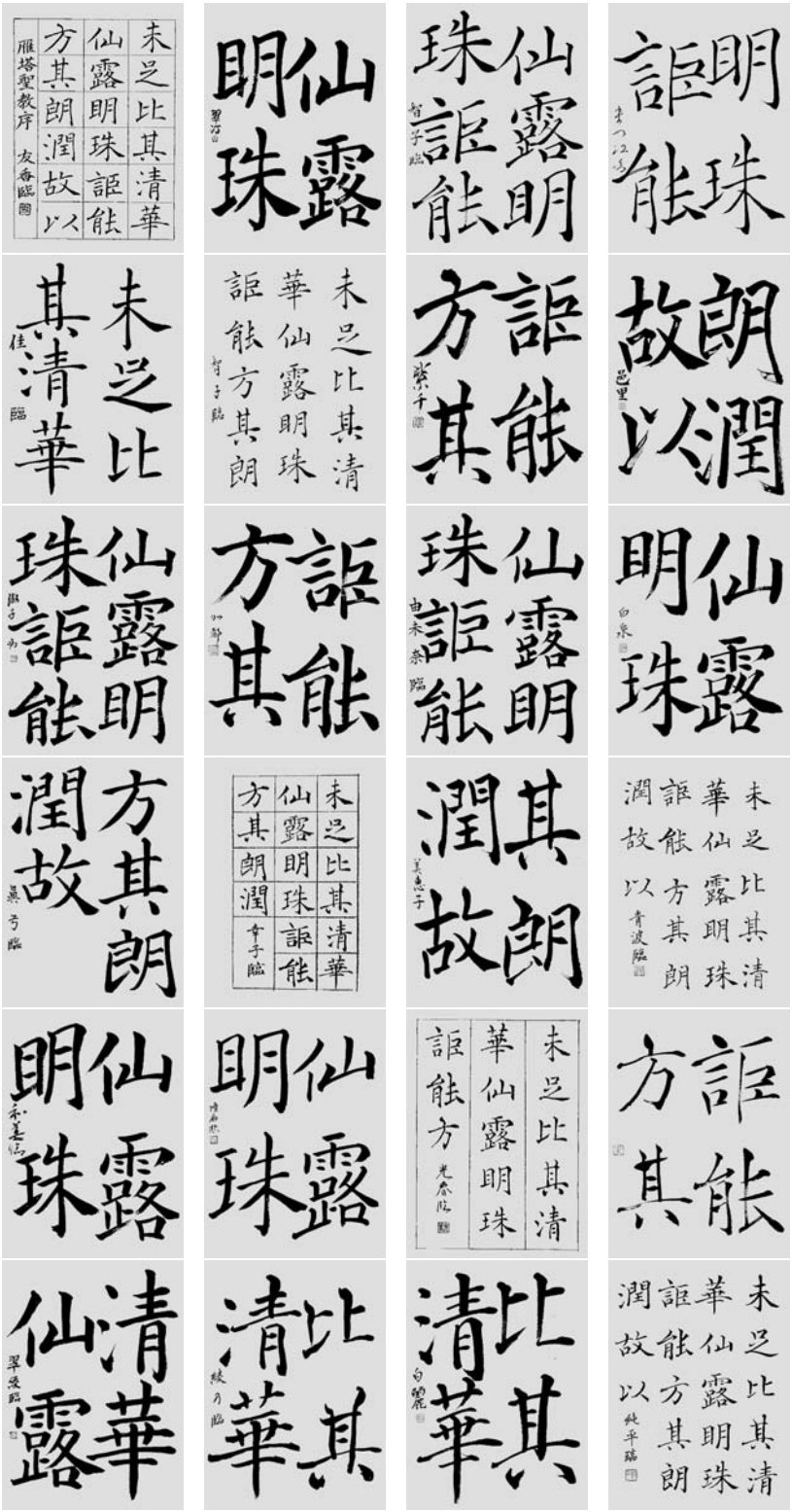
漢字研究部　特選　徳永　渓仙

この古典は楷書ですが、痩勁で行草の筆意が加わっています。その点を良く理解し、明るく伸びのある臨書に仕上がっています。又、痩勁な線の表現にもかかわらず、筆先が紙面をしっかり捉えています。

◎漢字研究部総評

楮遂良は用筆の基本に習熟した上に立って独自の書風を確立しています。従って基本の用筆を知らずに書くと、甘い臨書になってしまいます。特に縦画から趯（はね）に移行する際の筆先の挫きが甘く、紙面を撫でる様な点画になっている作品が目立ちました。

写真版にもれた中に、秀作にも拘わらず、「露」の雨部の横画や「潤」の門部の縦画を切って書いている作品が数点あり残念でした。



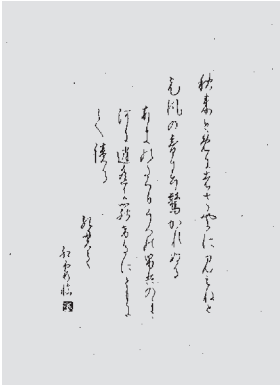
まつ江　翠和
邑里　眞美
白泉　淑弓
青波　佳子
江里　友香里
純平　翠綾

智子　翠汀
紫千　加子
由未奈　幸都
美恵春　隆子
光麗　綾扇
白　綾乃

かな研究部
（筋切）

選評　田村澄子

今月のホープ作品

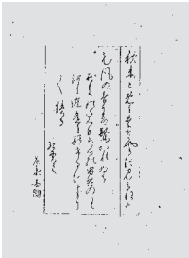


橋本紅霞

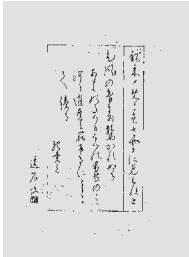
古筆をよく理解して書いてます。漢字と仮名の調和、純粋美の表現、巧みにこなした優れた作品になりました。お見事です。

◎かな研究部総評

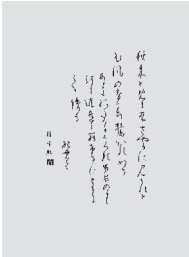
全体によく書けていました。古筆の作品が理解できたのか、すぐれた作品が多かったように思います。誤字もありませんでした。これからも古筆臨書に励んでください。



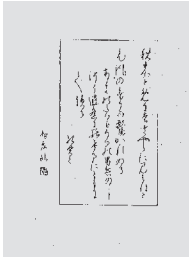
美昌花　雪子泉



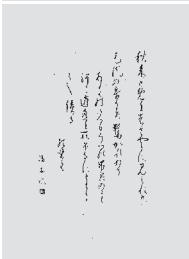
紅彩道　雅香石

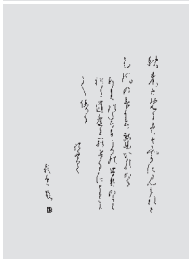


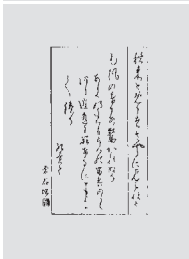
雅紅幹　泉咲生



令愛智　子石広







かな研究部成績表

特選

千葉明　彩やまI　A立精　千葉　澄春　彩泉会　竜く泉　もく上泉　千葉　竜大阪泉　彩澄春　高崎　蓮紅I　A竜泉　蓮紅　玉松習　石竜泉　玉松る　う上泉　石習　紅瑤　玉松

内田　岩崎　伊藤　伊東　磯地　飯田　宇田川　岸田　永田春　櫻田時　森田龍　岡村藤　平山弥生　森田谷　生駒子　大嶋華　岩瀬子　松浦園　本田江　藤村雪　高山花　遊佐紅　小川泉　犬飼香　高橋石　星野泉　飯高咲　山縣生　松丸石　鈴木広　橋本智

慈扇　洋子　敏子　京子　寿子　白麗　光彩　美昌子　花紅泉　彩道香　雅紅石　紅幹泉　令愛生　智広子　紅霞

秀作（60音順）

松村　京橋　東実　華祥　調布　澄春　華仙　大川　前切　堀府　幕橋　前田　別雲　林野　浜崎　長谷　根川　中津　中野　中村　戸尾　誉田　上泉　上松　高崎　玉松　千谷　秀峰　書水　生丸　紅瑤　A村　須田　竜大　たか　蘭鼎　若雲　広阪　大島　秀葉　竜水　こ泉　こ葉　苑書　大阪　高井

阿久澤隆華　吉田　吉崎　山藤　武田　増川　前切　堀府　別雲　林野　浜崎　長谷　根川　中津　中野　中村　戸尾　富澤　都丸　田村　須田　清水　後藤　河野　小桜　工藤　川本　河合　門脇　加藤　加藤　小野　野寺　榎田

佑子　眞理　桜江　蔦睦　華秀　栄雲　幸子　信子　玉華　永篁　千峰　飛龍　龍子　美子　恵子　恵舟　恵子　春華　香舟　由紀子　良泉　白篁　橋さくら　山房　南汀　和敬　信子　龍恵　翠陽　加都　萩光　和子

佳作（60音順）

竜泉　もく華　高陵　如月　こだ　竹美　竹扇　やま　椿翠　蘭鼎　こ水　硯　や　前ま　橋せ　はイ　小汀　秀畝　正華　大阪　雲溪　石舟　遊雲　大阪　大雲　有松　〃　竜泉　顧気　玉緑　千葉　正華　竹美　澄春　竜泉　蒼陽　蔦書　椿翠　華祥　英峰　安波　上泉　大阪　陽春　澄泉　竜泉　〃　上千葉　椿泉　翠

浅川みな　青柳教　青木藤　會木勇　綿貫智　吉野彩　横田蘭　山村炎　山口律　安嶋眞　森砂　宮寺直　宮澤晴　三嶋草　平田敏　春山美　長谷勝　永蓉久　長瀬子　永井蓉　一汀水　中村枝　仲真由　内西美　藤藤游　永池古　渓池溪　萩元　雅雲　耶大　花衣　龍源　利宝　祥子　杉風　志由起　塩澤紅　紫雲美　佐藤煌　櫻田月　齋藤麻　内田智　森書舟　竹内翠　澄春香　竜泉知　蒼陽子　後藤恵　込山子　小林雅　小井子　加藤晃　小野代　雅芳　小寺久　大沢淑　岩根美　岩崎江　岩井恵　今村英　猪関梨　池又霞　安田扇　藤美代子

若松　正華　生大漢　明葉　千谷　百　〃　たか　蕗書　昌苑　高崎　英峰　やま　松村　三鷹　樹原　京橋　枝苑　千葉　〃　大雲　広島　正華　初香　生大　梓江　竹扇　艸玄　秀穹　顧明　清書　高月　真か　A　土イ　前気　橋　〃　澄春　玉川　澄大　和春　N平　華祥　生大　澄春　安波　遊雲

菅沢百合子　神保幸佳子　新條三郎　嶋与祢　渋谷戸　宍谷愛　塩崎明　猿渡冬　猿渡華　佐藤篁　佐々木右　坂本千子　坂里美　坂麗恵　酒巻苑　斉藤早　齋藤苗　後藤か　後藤っ　後藤艶　近藤祥　近藤子　近藤淑　小河沼　河野初　高武恵　黒柳玄　熊谷竹　原城葉　菊池喜　菊池美　河野善　川岡高　亀井茶　加甲納木　紫輝子　紅星　尾形　小川輝　荻原清　甲斐二　大森代　大江里　内田枝　梅山茂　梅津久　生方佳　臼井由　碓井美　植田綾　宇富弘　今井楠　井井花　井上玉　和田英　伊藤良　板垣青　石橋鳳　飯島ひ　阿部紫　安部翠　部汀宛　明隆

選外224名氏名略　白露I S　風書　幸扇　東伯　己未　梓江　千葉　華仙　竹扇　澄春　松村　紅苑　玉川　白露　幕張　千葉　秀畝　長月　白曜　木陵　高会　泉　〃　澄春　土気　大雲　正華　秀水　詢扇　玉川　高陵　白珠　遊雲　大阪　遊雲　永岡　長井　玉田　生大　秀水　竜泉　秀会　立畝　春精　汀　英阪　やま　郷州　澄春　上泉　東小　香月

渡辺八重子　六本木弘　佐藤香　本根二風　山本真紀　山下美子　山根祐仙　山口鈴風　柳堀雪翠　柳堀隆　茂木政　茂川翠　宮妃真　湊美芳　松村子　松島陽　松重翠　増田舟　増田景　牧野伊　堀井優　堀江泉　北條幸　深堀法　深澤靖　清洗　佳月　優子　右真　日高子　平田智　東花敏　里子　野村子　野野陽　中羽喜　丹美子　西山恵　西澤裕　白人　遊珠　大峰　永岡紀　長井小　玉田仙　生大綾　秀水　竜泉　寺谷　土谷ま　辻井っ　筑井洋　千田宏　田原子　田中白　田中香　田中子　田蒼子　田良子　田哲子　宅佳子　高都子　橋幸子　草苑　木千代　鈴有子　木希　香生